

いかにして研究の内容と成果を公表するか

平成21年度疾病構造の地域特性対策専門委員会

- 日 時 平成21年12月10日（木） 午後2時～午後3時
- 場 所 鳥取県健康会館 鳥取市戎町
- 出席者 7人
岡本健対協会長、宮崎委員長、能勢・吉中各委員
県健康政策課：澤田副主幹
健対協事務局：岩垣係長、田中主事

議 事

1. 平成20年度事業報告について

平成20年度の疾病構造の地域特性対策専門委員会と母子保健対策専門委員会の事業報告を纏め、第23集を作成し、関係先に配布した。

母子保健対策は鳥大医学部 小児科 神崎教授による「甲状腺疾患母体から生まれた児の問題点：母体への過剰な抗甲状腺薬投与に起因する新生児一過性甲状腺機能低下症」について調査研究を行った。バセドウ病合併妊娠の管理の目標は、経胎盤的に移行した甲状腺受容体抗体による亢進症と、不適切な抗甲状腺薬投与による低下症の両者を防ぐことである。具体的な管理法は、母体の甲状腺受容体抗体が80%以上あるいは甲状腺刺激抗体200%以上の時には、新生児に甲状腺機能亢進症を来す可能性があるため、注意が必要となる。また、抗甲状腺薬投与中の場合、母体のfT4を基準値の上限付近とやや高めに維持すると、胎児の甲状腺機能を正常に維持することが可能となる。そして、出生直後から新生児の甲状腺機能を観察し、適切な治療を行うことが必要である。

疾病構造の地域特性対策は以下の5項目について調査を行った。

(1) 鳥取県における透析患者の実態調査と腎移植の推進に関する疫学調査（平成13年度より開始）

鳥取県では末期腎不全による透析患者が増加しており、高齢化と長期生存によりその管理が問題となっている。腎不全患者の治療として腎移植の推進が期待されている。献腎移植を希望して日本臓器移植ネットワークに登録している透析患者は平成21年3月現在11,899人であるが、鳥取県では38人が登録しており、人口比と比較すると少ない（期待値59人）。鳥取県臓器バンクの協力を得て、登録透析患者アンケート調査を行った結果、臓器バンクとして今後取り組む課題として、本県の腎移植認定医3人と永栄コーディネーターが協力して腎移植に関する電話相談システムを構築する必要がある。

(2) 肺癌の早期診断に関する調査（平成14年度より開始）

未だ検討されなかったことのない肺癌腫瘍マーカー候補であるNK細胞の表面に存在するNKG2D受容体のリガンドのひとつであるULBP2を測定した。その結果、検診健常者10例（6.3%）の陽性例を認めた。鳥取大学医学部附属病院で治療中の肺癌患者での陽性率は48%と高く、健常者の結果と比

較すると腫瘍マーカーとしての可能性は非常に高いものと考えられた。ただ、免疫機構の特性上、腫瘍細胞以外にも細菌やウイルスの感染細胞でNKG2Dリガンドが発現することが知られており、今回の陽性例においても個体背景を十分検討する必要がある。

(3) B型肝炎変に対する核酸アナログ投与の有 用性に関する調査（平成16年度より開始）

Lamivudine (LAM) をはじめとする核酸アナログ製剤は、B型肝炎ウイルス (HBV) の増殖を阻止し、肝炎を沈静化させ、肝の線維化を抑制し、肝実質機能を改善する。一方、核酸アナログ製剤がHCC治療後の再発および生存率を改善するかについては、一定の成績は得られていない。今回、HCC治療後における核酸アナログ製剤の有用性について検討した。

その結果、核酸アナログ投与によるHCCを合併したB型肝炎疾患であっても、B型慢性肝炎の場合と抗ウイルス効果は変わらないことが明らかとなったが、今回は核酸アナログ製剤投与によるHCC再発抑制効果は証明されなかった。今後更に多数例、長期の検討が必要である。

(4) 職場ですすめる健康づくりに関する研究（平 成17年度より開始）—動脈硬化症予防に関する 関連遺伝子多型を考慮した職域集団におけ る介入研究—

動脈硬化症予防に関する遺伝子多型を考慮した動脈硬化症予防プログラムを確立することを目的に、運動・食事指導などの介入による動脈硬化症リスクファクターの改善が遺伝子型の違いによりどのように異なるのかを検証した。

その結果、運動・食事指導などの介入が遺伝子型に関わらず動脈硬化症リスクファクターに対して十分な改善を示した。しかし、情報提供という弱い介入では有意な改善が見られなかった遺伝子型においては、強力な介入が必要であることを示唆している。

(5) 鳥取県における喫煙と肺がんの関 係に関する調査—喫煙と“肺年齢”の 関係からみた肺がんの特性— （平成20年度より開始）

一般には喫煙による肺がんは予後不良と言われているが、その要因として肺がんの悪性度が高いこと、呼吸器疾患や循環器疾患など重篤な他疾患の合併率が高いことが知られている。近年、日本呼吸器学会は肺機能から簡便に予測できる“肺年齢”という概念を提唱した。本研究では喫煙と“肺年齢”の関係を解析して、喫煙による肺がんの特性を検討した。

肺年齢は喫煙との関係が深く、肺がん特性に大きな影響を与えられられる。実際に自験例の肺がん手術患者を解析すると、肺年齢が実年齢を上回る差が大きいほど、喫煙者の割合が多く喫煙指数も高値であった。今後、喫煙者や受動喫煙者と呼吸機能、肺年齢と肺がん手術予後との関係を解析して、鳥取県における喫煙による肺がんの特性をさらに明らかにしていく予定である。

2. 平成21年度事業計画について

母子保健対策は、IGF系からみた低出生体重児の病因、母胎の甲状腺機能が胎児に及ぼす影響、小児のアディポサイトカインについて検討していく。

平成20年度で「肺がんの早期診断に関する調査」と「職場ですすめる健康づくりに関する研究」が終了し、平成21年度より「再建術式による胃全摘術後患者の生活の質 (QOL) の比較」と「鳥取県におけるがん罹患死亡の地域特性に関する記述疫学的研究」を行う。

(1) 鳥取県における透析患者の実態調査と腎移 植の推進に関する疫学調査

鳥取県臓器バンク、患者団体である腎友会の協力を得て、鳥取県における末期腎不全による透析患者の現状把握と課題の掘り起こしを計る。

(2) 「再健術式による胃全摘術後患者の生活の質(QOL)の比較(Roux-en-Y再建法とパウチ・ダブルトラクト再建法の比較試験)」

胃癌をはじめとする胃疾患に対する胃全摘術後の再建方法として、十二指腸側にパウチを作成するパウチ・ダブルトラクト再建法を新しく考案した。胃全摘後のパウチ・ダブルトラクト再建法の有用性を、従来法のRoux-en-Y再建法と比較し、確認する。

(3) 非アルコール性脂肪性肝疾患の実態と肝癌との関連

肥満や糖尿病の増加につれて、非アルコール性脂肪性肝疾患(NAFLD)が増加してきている。そのうち炎症と線維化を伴う脂肪肝炎(NASH)は、単純性脂肪肝(SS)と異なり、肝硬変、肝細胞癌へと進展することが知られているため、NASHの頻度、肝癌との関連性を検討する。

(4) 鳥取県におけるがん罹患・死亡の地域特性に関する記述疫学的研究

鳥取県におけるがんの実態を明らかにするため

に、がん罹患・死亡に関して人の属性から(性別・年代別)、空間的視点から(地域別)、また時間的視点から(年次別)という三つの視点から解析し、鳥取県におけるがん罹患・死亡の地域特性を明らかにして対がん活動の基礎資料とする。

(5) 鳥取県における喫煙と肺がんの関係に関する調査—喫煙と“肺年齢”の関係からみた肺がんの特性—

喫煙者や受動喫煙者の呼吸機能、肺年齢と肺がん手術予後との関係を解析して、鳥取県における喫煙による肺がんの特性をさらに明らかにしていく。

3. 平成22年度事業計画(案)について

平成21年度の5項目について、平成22年度も継続して調査研究して頂くこととなった。

この他、研究成果を県民に向けて発信する方法として、年2回開催される鳥取県医師会医学会で発表してもらおう。また、鳥取県医師会公開健康講座においても講演して頂く方向で検討することとなった。

